

不登校経験のある新入生の精神的健康に関する研究 (〈特集〉スポーツマネジメント)

著者名(日)	坂中 尚哉, 中島 力, 浦野 俊美, 菊間 由嘉里, 櫻井 興平
雑誌名	研究紀要
巻	8
ページ	81-89
発行年	2007-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000251/

不登校経験のある新入生の精神的健康に関する研究

Research on the Mental Health of Newly-enrolled Students with Experience of School Refusal

坂中尚哉* 中島力* 浦野俊美*
Naoya SAKANAKA Tsutomu NAKAJIMA Toshimi URANO
菊間由嘉里* 櫻井興平*
Yukari KIKUMA Kohei SAKURAI

抄録

関西国際大学カウンセリング室では、精神保健問題の早期発見・早期対応を目的として、1999年度から新入生に対する生活意識調査を実施している。本稿は、本学の2006年度の新入生を対象として、生活意識調査内のUPI(大学生精神的健康調査)をもとに、不登校経験のある学生の精神健康状態について分析した。その結果、不登校経験者群は未経験者群と比べて、「人と会うのが嫌」「死にたい」「付き合いが嫌」などの『嫌人・不信』の因子及び「悲観的」「気疲れ」「引け目を感じる」などの『こだわり』の因子において、統計的に有意に高かった。次に、いじめられた経験のある不登校経験者群のUPIにおいて、「やる気のなさ」「悲観的」など、無気力感や自己否定感などを体験しやすく、加えて「死にたくなる」の項目の選択率が高まること明らかにされた。

1. 問題と目的

本学のカウンセリング室は、学習支援センターの一部門として、1998年の経営学部開学と同時に開設された。カウンセリング室(学生相談室)においては、学生生活の適応にまつわる各種相談が行われている。

カウンセリング室では、精神保健問題の早期発見・早期対応を目的として、1999年度から新入生に対する生活意識調査を実施しており、すでに、山本ほか(2000)、田中ほか(2004)、坂中ほか(2005)によって、本学の新入生の意識調査やUPIを使用した精神的健康に関する報告を行っている。

近年、カウンセリング室の利用状況は、年々増加の一途を辿っている。来談者の増加の背景には、カウンセリングに対する心理的敷居の低下に留まらず、昨今の入学者のメンタルヘルス上の問題と相まっているように思われる。とりわけ、本学への入学以前において、不登校や引きこもりなどを経て入学する学生も多く、「ようやく高校卒業資格を取得できた」と感慨深く話す学生も少なくない。

本稿では、そうした外界からの心理的距離をとりながら内的な適応を果たしてきた不登校や引きこ

* 関西国際大学カウンセリング室

もり経験者を対象にUPIの諸特徴について検討する。また、過去のいじめられた経験者のUPIについても若干触れたい。

2. 方 法

2. 1 使用した質問紙UPIについて

質問紙UPIは、1966年に榊原をはじめとする学生の精神健康に携わる研究者によって作成された(宮田他, 1967)。現在用いられているものは、A5版60項目よりなる(小柳, 1987)。

UPIの項目内容は、大学生活で不適應をきたす恐れのある性格傾向、神経症傾向、抑うつ傾向、統合失調症傾向などの有無を問うことを意図した56項目と、4項目の妥当性項目(陽性項目)の全60項目から構成されている。

各項目は0点か1点で、本研究では、妥当性項目を除いた56項目の得点をUPI得点としているので、UPI得点がとりうる得点範囲は0～56点である。得点が高いほど精神的あるいは身体的に不健康であることを示すよう評定されている。

2. 2 調査対象者および調査の実施

2. 2. 1 調査対象者について

本学の2006年度の入学生を調査対象に行った。各学部の受検者の内訳は、経営学部125名、人間学部267名、合計392名が本研究の調査対象者となった。

2. 2. 2 不登校経験者群の抽出について

「不登校経験者群」の抽出は、入学時に行った意識調査内の質問項目において2段階式で回答を求めた。設問①には、「今までの学校生活の中で学校に行きたくないと思っただことがありますか。」との問いに対して、「ある・ない」の2件法で回答を求めた。さらに、設問②において、「ある」と回答した人を対象に「1年間に30日以上学校に行かなかったことがありますか。」との問いに対して、「ある・ない」の2件法で回答を求めた。その結果、設問②で「ある」と回答した学生を「不登校経験者群」と命名した。また、それ以外の調査対象者は、「未経験者群」とした。

2. 2. 3 いじめられ経験者群の抽出について

「いじめられ経験者群」の抽出は、先の意識調査内の質問項目において、「今までの学生生活の中で『いじめ』にあったことがありますか。」との問いに対して、「ある・ない」の2件法で回答を求めた。「ある」と回答した学生を「いじめられ経験者群」と命名した。

表1 不登校経験者群の人数及び出現率

学部	学生数	出現率
経営学部	12人	9.4%
人間学部	28人	10.2%
全体	40人	9.8%

表2 いじめられ経験者の人数及び出現率

学部	学生数	出現率
経営学部	11人	8.7%
人間学部	49人	21%
全体	60人	14.6%

2. 2. 4 調査実施方法と実施期間

入学前の3月頃に入学手続きに関する資料内に同封し、後日郵送してもらった。回収率は、100%であった。

3. 結果と考察—かつて不登校経験のある新入生の精神的健康について—

本研究では、2006年度入学者の新入生意識調査内のUPIに関して、主に不登校経験の有無、いじめられ経験の有無などの観点について、 χ^2 検定を行い、その結果を10%の危険率のある有意項目を*、5%の危険率のある有意項目を**、1%の危険率のある有意項目を***の記号で記載している。

3. 1 不登校経験者と不登校未経験群との比較について

3. 1. 1 陽性項目について

表3は、不登校経験者群と未経験者群の陽性項目に関する出現率について示している。陽性項目には、①「いつも体の調子がよい」(以下、身体良好と略す)②「いつも活動的である」(以下、活動的と略す)③「気分が明るい」④「よく他人に好かれる」の4項目である。

「身体良好」($\chi^2(1) = 5.143, p < .05$)、「活動的」($\chi^2(1) = 5.765, p < .05$)、「気分が明るい」($\chi^2(1) = 8.758, p < .01$)「よく他人に好かれる」($\chi^2(1) = 12.565, p < .01$)の陽性項目のすべてにおいて、不登校経験者群の得点が有意に低かった。本来、4つの陽性項目(妥当性項目)は、受検態度の判定を意図して作成された項目であるが、「妥当性項目を活動性と解釈する」(伊藤, 1983)という見解が一般的であり、妥当性項目の高さは「活動性」「積極性」として解釈される。

表3 不登校経験者群と未経験者群の陽性項目の出現率について

NO	項目	不登校経験者群	未経験者群	有意差
5	身体良好	8%	20%	*
20	活動的	10%	24%	*
35	気分明るい	8%	25%	**
50	他人に好かれる	3%	20%	**

*10%水準で有意差あり **5%水準で有意差あり ***1%で有意差あり

このことから、不登校経験者の精神的健康さは、不登校未経験者の学生と比べて、活動性や積極性に劣り、精神的健康度は低いと考えられる。

3. 1. 2 神経症状とUPIとの関連について

平山(1991)らは、UPIを用いて、恐怖症や抑うつ神経症、不安神経症、強迫神経症などの判別について80%可能であることを報告している。また、神経症の下位分類として、第1因子『こだわり』(45,42,51,22,57,44,52,60,58,13,39,38)、第2因子『身体症状』(46,2,17,48,1,18,4,5)、第3因子『抑うつ』(28,30,39,14,28,12,38)、第4因子『嫌人・不信』(41,10,26,43,25,59)、第5因子『気分変動』(24,23,6,15)、第6因子『Lie』(35,20,50)、第7因子『易感性』(56,40,55)、第8因子『自律系症状』(31,32)の8因子に分類している。そこで、平山の分類に基づいて8つの因子に関して、本学の不登校経験者群と未経験者群との比較検討を行った。

表4は、不登校経験者群と未経験者群の神経症項目について示してある。その結果、10「人と会うのが嫌」($\chi^2(1) = 3.333, .05 < p < .10$)、25「死にたい」($\chi^2(1) = 6.125, p < .05$)、43「付き合いが嫌」($\chi^2(1) = 3.857, p < .05$)の『嫌人・不信』因子に有意な偏りが見られ、不登校経験者の得点が高かった。また、13「悲観的」($\chi^2(1) = 5.085, p < .05$)、22「気疲れ」($\chi^2(1) = 3.169, .05 < p < .10$)、44「引け目を感じる」($\chi^2(1) = 7.410, p < .01$)の『こだわり』因子に有意な偏りが見られ、不登校経験者群の得点が高かった。

表3 不登校経験者群と未経験者群の神経症項目について

NO	項目	不登校経験者群	未経験者群	有意差
10	人と会うのが嫌	20%	10%	*
25	死にたい	23%	9%	**
43	付き合いが嫌	15%	6%	**
13	悲観的	45%	26%	**
22	気疲れ	43%	28%	*
44	引け目を感じる	28%	11%	***

*10%水準で有意差あり **5%水準で有意差あり ***1%で有意差あり

以上のように、『嫌人・不信』、『こだわり』の2因子において、不登校経験者群の得点が不登校未経験者群と比して統計的に有意に高かった。一般的に、不登校になる背景や状況は事例によって異なるものの、社会生活からの物理的、心理的な距離をとりながら、内界の適応を果たすといった特徴があげられる。またカウンセリング室には、かつて不登校経験のある学生たちが、大学内の対人関係に悩み、模索する相談は多く寄せられる。筆者は、不登校経験者とのカウンセリングを通じて、不登校経験者の『こだわり』や『嫌人・不信』といったスタイルは、学校生活上の対人関係での傷つきなどを経ている場合が多いために、そうした外界からの刺激に対して適度な距離を保ちつつ、個人の内的適応を達成するための重要な所作であったのではないかと考えている。

3. 2 いじめられ経験のある不登校経験者群のUPIについて

表2は、本学の各学部において、過去にいじめられた経験のある学生の出現率を示している。その結果、経営学部は8.7%、人間学部は21%であり、人間学部のほうが経営学部よりも統計的に出現率が高かった。 $(\chi^2(1) = 4.800, p < .05)$ また、過去にいじめられた経験のある不登校経験者群は30%であった。以下に、いじめられた経験のある不登校経験者群のUPIの特徴について触れる。

表5は、UPIの出現率の高かった上位10項目を示している。その特徴として、無気力感や身体症状、自己否定感といった項目が選択されている。特筆すべきことに、25「死にたくなる」の項目の出現率が42%であった。筆者ら(2005)が報告した2002年度及び2004年度の全体のサンプルでは、「死にたくなる」の出現率が、2002年度6%、2004年度8%であり、その差異は顕著である。過去にいじめられた経験のある不登校経験者の内面が、いかに外界からの心理的な守りの薄さに伴い、自己保全の感覚が少ないのかが伺い知れる。

筆者との不登校経験のある学生とのカウンセリングにおいても、学童期や思春期の学校生活での無視や暴力的行為を受け、過去の傷がまだ癒えない事例は枚挙にいとまがない。ある学生は、「過去の時間が今の時間にすりかわり、過去からの時間がいっこうに動かない」といじめられたときの体験のトラウマを語り、現実の時間と過去の時間の不連続性に苦しむ姿はあまりにも痛々しさを感じる。

表5 いじめられた経験のある不登校経験者群の上位項目について

NO	項目	出現率
12	やる気がない	50%
13	悲観的になる	50%
15	気分が波がありすぎる	50%
46	体だるい	50%
58	他人の視線が気になって困る	50%
18	首筋や肩がこる	42%
21	気が小さすぎる	42%
22	気疲れする	42%
25	死にたくなる	42%
27	記憶力が低下している	42%

4. まとめ

本研究では、2006年度の新入生に対して、入学時の精神的健康状態に関する諸特徴について、UPIをもとに分析を行った。以下に、本学学生にみられる不登校経験者のUPIの特徴について述べておきたい。

はじめに、平山(1991)の神経症状に関する8つの因子分類をもとに、不登校経験者群と未経験者群との比較を行った。その結果、不登校経験者群は、「人と会うのが嫌」「死にたい」「付き合いが嫌」などの『嫌人・不信』の因子及び「悲観的」「気疲れ」「引け目を感じる」などの『こだわり』の因子において、統計的に有意に高かった。

次に、いじめられた経験のある不登校経験者群のUPIにおいて、「やる気のなさ」「悲観的」「死にたくなる」など、無気力感や自己否定感などを体験しやすいことが明らかになった。

以上のように、不登校経験やいじめられ経験は、本人のこころの傷になりやすく、自己否定感を高めるものになってしまう。そうした内なる苦しみから新たな地平に着地するには、枯れんばかりの声なき声に真剣に耳を傾ける他者が必要であることを付言しておきたい。

引用文献

- 1) 伊藤裕子：「UPI 25番についての検討－女子学生に見るUPI 25番の意味について－」
『第四国大学精神衛生研究会報告書』 1983 60～64頁
- 2) 坂中尚哉・浦野俊美・中島力・田中亜裕子・小林俊三・清水将之：「カウンセリング室からみた学生の姿(3)－新入生生活意識調査のUPI結果報告－」『関西国際大学研究紀要』6号 2005
147～159頁
- 3) 田中亜裕子・小林俊三・浦野俊美・坂中尚哉・山本真由美：「カウンセリング室からみた学生の姿(2)－新入生意識調査の結果報告－」『関西国際大学研究紀要』5号 2004 171～179頁
- 4) 平山皓・岡庭武・湊博昭・沢崎俊夫：「大学生の神経症とUPI」『第11回大学精神衛生研究会報告書』 1990 87～95頁
- 5) 平山皓・岡庭武・湊博昭・沢崎俊夫：「大学生の神経症とUPI」『第12回大学精神衛生研究会報告書』 1991 60～67頁
- 6) 山本真由美・荻田純久・田中亜裕子・浦野俊美：「カウンセリング室から見た学生の姿」『関西国際大学研究紀要』1号 2000 271～283頁

新 入 生 生 活 意 識 調 査

性別	男	女	年 齢	歳	受験番号	
所属	(学 部) (学 科) (専 攻)	

1. あなたが本学に入学した理由をすべて選んで○印をつけて下さい。なお、2つ以上ある場合は、最も重視したものに◎印をつけて下さい。

- | | | |
|---------------------|-----------------------------|-------------------|
| (1) 視野を広げたいから | (2) 人格形成をはかるため | (3) 友人関係を広げるため |
| (4) 教養を広げるため | (5) 専門知識や技術を修得するため | (6) 資格を得るため |
| (7) 学生生活や課外活動を楽しむため | (8) 学問研究がしたいから | (9) 就職に必要な勉強をするため |
| (10) 人並みの学歴を身につけたい | (11) このまま社会に出るのは不安 | (12) 自由な時間を持ちたいから |
| (13) 家族や先生がすすめたから | (14) 就職に有利だから | (15) 結婚に有利だから |
| (16) 皆が大学に行くから | (17) その他(具体的に書いて下さい: _____) | |

2. あなたは今どのような大学生活を送りたいと考えていますか。教えてください。

3. あなたが今関心を持っていることは何でしょうか。当てはまるものすべてに○印をつけて下さい。なお、2つ以上ある場合は、最も関心の高いものに◎印をつけて下さい。

- (1) お金 (2) 勉強 (3) 友人 (4) 健康 (5) ファッション (6) 自分の性格 (7) 自分の身体
 (8) 趣味 (9) セックス (10) 学外の活動(アルバイトを含む) (11) 恋人 (12) 家族 (13) 将来の生き方
 (14) 食べ物 (15) 今の生活 (16) 就職 (17) その他(_____)

4. 今までにかかった病気で知っておいてもらいたいものがあれば教えてください。

いつ頃: _____
 病 名: _____

5. 現在治療中の病気で知っておいてもらいたいものがあれば教えてください。

病 名: _____

6. 今までの学校生活の中で学校に行きたくないと思ったことがありますか。

- (1) ある (2) ない

6-1. 6で「ある」と回答した人に伺います。1年間に30日以上学校に行かなかったことがありますか。

- (1) ある (2) ない

7. 今までの学校生活の中で「いじめ」にあったことがありますか。

- (1) ある (2) ない

8. 今までの学校生活の中で「いじめ」をしたことがありますか。

- (1) ある (2) ない

9. あなたは「カウンセリング」という言葉を本学入学以前にきいたことがありますか。

- (1) ある (2) ない

⇒裏面につづく

不登校経験のある新入生の精神的健康に関する研究

10. 「カウンセリング」という言葉をきくとどんなイメージが浮かびますか。

11. 今までにカウンセラーに相談したことがありますか

(1) ある (2) ない

12. 本学ではカウンセリング室でいろいろな相談にのっています。あなたは今カウンセラーに相談したいと思いますか。

(1) 思う (2) 思わない

13. 相談したいことがある人は、どんなことで相談したいですか(簡単に)。

14. 相談したいことがある人は、連絡先を書いて下さい。

(電話番号等) _____

15. 以下の項目の中で、この1年間くらいで時々感じたり、経験したりしたことのある項目がありますか。あまり深く考えないで当てはまるものすべてに○印をつけて下さい。

- | | | | |
|--------------------|-----|---------------------|-----|
| 1) 食欲がない | () | 31) 赤面して困る | () |
| 2) 吐気・胸やけ・腹痛がある | () | 32) 吃ったり、声がふるえる | () |
| 3) わけもなく下痢や便秘をしやすい | () | 33) 体がほてったり、冷えたりする | () |
| 4) 動悸や脈が気になる | () | 34) 排尿や性器のことが気になる | () |
| 5) いつも体の調子がよい | () | 35) 気分が明るい | () |
| 6) 不平や不満が多い | () | 36) なんとなく不安である | () |
| 7) 親が期待しすぎる | () | 37) 独りでいると落ちつかない | () |
| 8) 自分の過去や家庭は不幸である | () | 38) ものごとに自信をもてない | () |
| 9) 将来のことを心配しすぎる | () | 39) 何事もためらいがちである | () |
| 10) 人に会いたくない | () | 40) 他人にわるくとられやすい | () |
| 11) 自分が自分でない感じがする | () | 41) 他人が信じられない | () |
| 12) やる気が出てこない | () | 42) 気をまわしすぎる | () |
| 13) 悲観的になる | () | 43) つきあいが嫌いである | () |
| 14) 考えがまとまらない | () | 44) ひけ目を感じる | () |
| 15) 気分が波がありすぎる | () | 45) とりこし苦労をする | () |
| 16) 不眠がちである | () | 46) 体がだるい | () |
| 17) 頭痛がする | () | 47) 気にすると冷や汗が出やすい | () |
| 18) 首筋や肩がこる | () | 48) めまいや立ちくらみがする | () |
| 19) 胸が痛んだり、しめつけられる | () | 49) 気を失ったり、ひきつけたりする | () |
| 20) いつも活動的である | () | 50) よく他人に好かれる | () |
| 21) 気が小さすぎる | () | 51) こだわりすぎる | () |
| 22) 気疲れする | () | 52) くり返し確かめないと苦しい | () |
| 23) いらいらしやすい | () | 53) 汚れが気になって困る | () |
| 24) おこりっぽい | () | 54) つまらない考えがとれない | () |
| 25) 死にたくなる | () | 55) 自分の変な匂いが気になる | () |
| 26) 何事も生き生きと感じられない | () | 56) 他人に陰口をいわれる | () |
| 27) 記憶力が低下している | () | 57) 周囲の人が気になって困る | () |
| 28) 根気が続かない | () | 58) 他人の視線が気になる | () |
| 29) 決断力がない | () | 59) 他人に相手にされない | () |
| 30) 人に頼りすぎる | () | 60) 気持ちが傷つけられやすい | () |

以上で終わりです。では、今後も有意義な学生生活を送って下さい。

Abstract

Since 1999, the counseling room has conducted the attitude survey of everyday life on newly - enrolled students in order to discover their mental problems and help them cope with them. In the academic year 2006, we conducted the survey of the mental health condition of students who have experience of refusing to go to school as a neurotic symptom through the UPI(University Personality Inventory) on the newly - enrolled students. Our results suggest that the group of the students who have refused to go to school has a statistically stronger tendency than the order in the factor of avoidance of meeting people and of distrust represented by choosing such items as "I don't like to meet people", "I want to die" or "I don't like to get along with someone", and in the factor of a persistent idea or obsession choosing such items as "I am pessimistic" or "I am mentally fatigued". Our results also indicate that the students who were bullied and were no able to go to school in the past tend to have an apathetic feeling or a feeling of self - denial, choosing such items as "I am pessimistic", or "I am reluctant to do anything". Our study also revealed that the rate of choosing the item of " I want to die," by this group is statistically higher than the other.